T2R2 東京科学大学 リサーチリポジトリ
Science Tokyo Research Repository

論文 / 著書情報
Article / Book Information

題目(和文)	現代建築作品における空間の大きさの比較表現
Title(English)	THE SCALAR RHETORIC OF SPATIAL DIMENSIONING IN CONTEMPORARY ARCHITECTURE
著者(和文)	長谷川豪
Author(English)	Go Hasegawa
出典(和文)	学位:博士（工学）, 学位授与機関:東京工業大学, 報告番号:甲第9792号, 授与年月日:2015年3月26日, 学位の種別:課程博士, 審査員:塚本　由晴,藤岡　洋保,安田　幸一,奥山　信一,村田　涼
Citation(English)	Degree:, Conferring organization: Tokyo Institute of Technology, Report number:甲第9792号, Conferred date:2015/3/26, Degree Type:Course doctor, Examiner:,,,,
学位種別(和文)	博士論文
Category(English)	Doctoral Thesis
種別(和文)	審査の要旨
Type(English)	Exam Summary

Powered by T2R2 (Science Tokyo Research Repository)

（博士課程）

論文審査の要旨及び審査員

報告番号	甲第	12D17037	号	学位申請者氏名	長谷川 豪	
論文審査 審査員		氏　名	職　名		氏　名	職　名
	主査	塚本 由晴	准教授	審査員	村田 涼	准教授
	審査員	藤岡 洋保	教授			
		安田 幸一	教授			
		奥山 信一	教授			

論文審査の要旨（2000 字程度）

本論文は「現代建築作品における空間の大きさの比較表現」と題し、以下の６章から構成されている。

第１章「序論」では、研究の背景、意義と目的、研究の資料と方法、従来の研究との比較、および論文の構成について述べている。本章ではまず、一つの建築のなかで大きさの比較を通して部分同士が関係づけられる自己参照的な尺度の表現を「空間の大きさの比較表現」と呼び、それが階、室、部位といった建築の構成単位ごとに見出されることを指摘したうえで、そうした表現を用いた現代建築作品を国内外の建築専門誌から資料として収集し、空間の大きさを比較する尺度の組み合わせから構成類型を導くことを通して、現代建築における「空間の大きさの比較表現」がどのように成立しているかを明らかにするという研究の方法と目的について述べている。

第２章「階の構成による空間の大きさの比較表現」では、複数の階をもつ住宅作品を事例として、各階の天井高と平面の大きさの違いによる「階構成」を整理したうえで、これとエントランスの位置、下階と地面の関係、上階と屋根・空の関係を重ねて検討し構成類型を導くことを通して、空との隣接性の強調、地面との隣接性の強調、空と地面との隣接性を上下階で別々に利用、空と地面の両方との隣接性の強調、さらに空と地面の対比の非分節、といった地面と空の対比関係を軸にした階の構成による「空間の大きさの比較表現」の形式を明らかにしている。

第３章「室の配列による空間の大きさの比較表現」では、室の配列に「空間の大きさの比較表現」が見られる建築作品を事例として、室の種類と配列を定義し、室の配列による空間の大きさを比較する尺度としての幅、奥行き、高さが、差異を表現する「パラメータ」と同一性を表現する「コンスタント」のどちらにもなり得ること、またそれらの組み合わせによる空間の大きさの比較方法には「直接比較」と「間接比較」の２つがあることを指摘したうえで、これらが生じさせる室のまとめ方における階層の検討から構成類型を導くことを通して、単一の空間の大きさの比較方法、同一の空間の大きさの比較方法の反復、異なる空間の大きさの比較方法の階層化、異なる空間の大きさの比較方法の並置、といった室の配列による「空間の大きさの比較表現」の形式を明らかにしている。

第４章「部位の配列による空間の大きさの比較表現」では、部位の配列に「空間の大きさの比較表現」が見られる建築作品を事例として、床、壁、屋根、天井といった建築部位とその配列を定義し、部位の配列によって空間の大きさを幅、奥行き、高さ、勾配といった尺度を介して変化させる建築では、位置の基準になる部位と空間の大きさを比較する部位に役割が分配されることで平面図や断面図にグラフのような性格が表れることを指摘したうえで、これらグラフのパタンの組み合わせから構成類型を導くことを通して、部位の配列を単一の尺度で組織、部位の配列を２つから４つの尺度の連動のなかに組織、さらに部位の配列による尺度の連動を部分としての空間単位に重ねた反復、といった部位の配列による「空間の大きさの比較表現」の形式を明らかにしている。

第５章「構成単位の違いから見た空間の大きさの比較表現」では第２章から第４章の検討をもとに、「空間の大きさの比較表現」の構成単位による特徴を比較し、階の構成は＜対比＞、室の配列は＜階層＞、部位の配列は＜尺度の連動＞といった秩序を、どのように利用するかという様々な表現と、それらを利用しない表現を共に位置づけることによって、「空間の大きさの比較表現」が現代建築に多様性や複雑さをもたらす批評的な体系を明らかにしている。

第６章「結論」では、各章で得られた結果をまとめ、本論文で得られた知見を総括している。

以上を要するに、本論文は、一つの建築のなかで大きさの比較を通して部分同士が関係づけられる「空間の大きさの比較表現」を、階、室、部位といった建築の構成単位ごとに検討し、こうした表現が現代建築に多様性や複雑さをもたらしていることを明らかにしたものである。この結果は、建築にとって一貫して重要であり続けてきた尺度に関して、自己参照的に部分同士を関係づける新たな表現を見出すことで、尺度の表現についての批評的な体系を構築し、建築意匠論の展開に寄与するものと考えられる。従って、本論文の成果は、建築学および工学に貢献するところが大きく、博士（工学）の学位論文として十分に価値のあるものと認められる。